

平成19年度野幌自然環境モニタリング調査結果概要

北海道森林管理局では、「百年前の原始性が感じられる自然林」の再生活動を実施している野幌森林公園（江別市ほか）の自然環境変化を把握するため、18年度から、森林植生、歩行性甲虫相、菌類相、及び野生動物の4項目について調査を実施。

1 調査箇所（森林植生、歩行性甲虫相、菌類相）

平成16年秋の台風による風倒後、主として重機を用いた地拵を行った後、植樹などの森林再生活動が行われている箇所（「再生活動地」という。）

風倒木を搬出後、試験的に放置している箇所（「半処理区」という）

風倒後、試験的にそのまま放置している箇所（「非処理区」という）

野幌を代表する林相を有し、風倒被害をあまり受けずに現存する「百年前の原始性」が感じられる森林（「良好な自然林」という）

風倒被害を受けていない人工林（「無被害人工林」という）

2 森林植生

良好な自然林については、プロット内の樹木の樹高・直径、植物の被覆度等を測定。他の調査箇所については、5×5mプロットを3～5ずつ設定し、出現する植物を記録。

(1) 良好な自然林（3箇所）

トドマツ林

トドマツは、上層木本数の約4割を占める（最大樹高27m）が、中下層にはほとんどない。林床はハイイヌガヤが約8割。

ミズナラ林

上層木本数の約4割がミズナラ（最大樹高30m）。他に、ウダイカンバ、アカイタヤなど。林床被覆の約7割はチシマザサ。

ハンノキ林

比較的まとまった面積で残っているハンノキ林を調査。上層木に占めるハンノキの本数比率は約7割。最大樹高はウダイカンバの30m。



（ミズナラ自然林）

(2) 非処理区（1箇所）

オオカメノキ、ヤマグワなどの非高木性樹種が多いものの、ミズキ、シナノキ、キタコブシなどの高木性樹種も約2.2千本/ha発生。トドマツ稚樹は今のところ見られない。



（非処理区の様子）

(3) 半処理区（1箇所）

ヤマグワ、タラノキ、エゾニワトコ等の非高木性樹種が繁茂し、高木性のものは1.4千本/ha（ミズキ等）程度。ササ類の被覆が多い場所もあり。

(4) 再生活動地(5箇所)

植栽木：針葉樹の伸びはまだ少ないが、ケヤマハンノキの一部は既に2~3mに成長。
天然更新の状況：5箇所とも高木性樹種が多数発生(4.5千~22.6千本/ha)。一部箇所では、外来種ニセアカシアが3.8千本/haも発生。

4 歩行性甲虫相

ピットフォールトラップにて歩行性甲虫を捕獲することにより調査を実施。

(1) 19年度の総捕獲種数は75(18年度は80種)

(2) 再生活動地では、畑や荒地など開放地に生息する種の出現比率が前年に比べて増加。これは、草本の増加に伴い、草本種子を摂食するマルガタゴミムシ類などが増加したためと分析。



(マルガタゴミムシ)

(3) 非処理区では、昨年と同様に、森林性の種の出現比率が無被害人工林や良好な自然林に匹敵するほどの高比率(9割程度)。このことは、歩行性甲虫は非処理区の指標として有効ではない可能性も示唆。

5 菌類相

一調査箇所あたり50x5mの帯状区を2本設定し、木材腐朽菌の子実体を調査。

(1) 再生活動地では出現種数が少なく、ウスバシハイタケなど一部の種が優占。一方、自然林では出現種数が多く、特定種の優占なし。無被害人工林は、両者の中間的傾向。

	再生活動地	自然林	無被害人工林
特徴的な種	ウスバシハイタケ、スエヒロタケ、カワラタケ	ヒメキクラゲ、サカズキカワラタケ	ウスバシハイタケ、モミサルノコシカケ

(2) 再生活動地では、散在する枯死木の投影面積と菌類の出現頻度には正の相関が見られたことから、現時点は、枯死木を分解する菌類が旺盛に出現している状況と分析。

6 野生動物

自動撮影装置を12箇所に設置し、夏と秋の2回夜間撮影を実施。

(1) 撮影頻度が最も高かったのはキツネ。以下、順にアライグマ、ネコ、ユキウサギ、コウモリ類、エゾシカ、エゾリス、イヌ、タヌキ、イタチ。

(2) 特定外来種のアライグマが11箇所撮影されるなど公園内に広く定着していることを確認。また、森林再生への影響も懸念されるエゾシカについては、オスメスとも生息していることを確認。



(アライグマ)

問い合わせ先：北海道森林管理局 石狩地域森林環境保全ふれあいセンター

〒064-0809 札幌市中央区南9条西23丁目1-10

TEL：011-533-6741 E-mail：h_ishikari_f@rinya.maff.go.jp